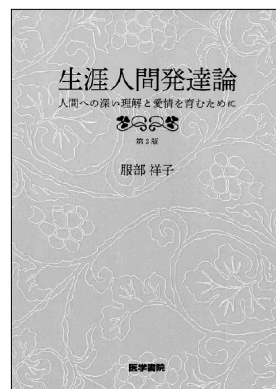


『生涯人間発達論 第2版 人間への深い理解と愛情を育むために』

「人間が全体として発達していくこと」を読者が味わう書

著：服部祥子 定価 1,995 円(本体 1,900 円+税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



私は成人看護学概論の授業を担当していて、青年期にある学生たちに対して、「成人期」を説明するのに四苦八苦している。あるとき、グループワーク課題に、親世代へのインタビューを通して成人後期の発達課題を整理せよ、を出した。人々の姿と共に「ミドルエイジクライシス」と呼ばれる様相が、グループで浮き彫りにされると期待したのだけれど、結果は、学生たちはさっさとありきたりの文語を箇条書きに並べていっただけだった。「待て、待て～い！ 君たちはインタビューしてその人の話を聞いてきたのでしょ。その人の生き様をとらえずして、何をやっているの！」と活を入れた(つもりだった)。学生たちは「はあ～、生き様!? (何をオーバーなことを言って)」と場は一瞬にして白けた。

いま私は決意している。今度からは、「生涯人間発達論」で紹介されていたアガサ・クリスティ『春にして君を離れ』を読ませ、今一度「生涯にわたる人間の発達」という視点から見える、人間の奥深さと、その存在への敬意を学生たちに伝えなければ、と……。

本書を手にしたとき、私が迷うことなく最初にページを開いたのが「成人後期」の章だった。そして我を忘れてのめりこむように一気に読んだ。青年期の発達課題、それは同一性(identity)の確立であり、そして熟年とよばれる人々の発達課題

と危機は「『同一性再確立対消極性』である」と筆者は述べる。つまり、青年期に確立した(かに見える)「自己の存在」を、成熟期にもう一度その深淵を覗き込みながら再確立を試みる年代だという。言い方を変えれば、社会的な役割を多く担うなかで生まれる自信と、同時に「空の巣」と呼ばれる役割減少の狭間で、「私の人生はこれでよいのか」の問いを大きくしていく年代だというのである。こうした問いの中で行く手に感ずる、「一歩踏み出しのときだ」や「変化の主体となる必要性」のささやき。しかし平穏さ、安穩さへの回帰が、分別・あきらめ・嘆息と共に、この人々を日常性に落とし込んでいく。このことを筆者は「同一性再確立対消極性」と指摘した。そう、その通り。熟年とは、「私はあと何ができるのか」の問いと「青臭い自分への自嘲」でゆれる心情の人々なのである。

それにしても、本書に挿入されている写真には見とれてしまう。ライフサイクルの象徴を1枚の写真が表していて、人々の喜び(乳児期)、ほほえましさ(幼児前期)、生活習慣(幼児後期)、わんぱくの力強さ(学童期)、ピュアなかわいさ(思春期)、意気込み(青年期)、そして門出と拡大・キャリア(成人期)が伝わってくる。また最後の老年期の写真からは、暮らしの中の支えあいと、交し合うことばと笑顔のハーモニー——それらどれもの素敵さに感じ入ったのだった。